

北見工業大学学報

第 299 号 (2020 年 5 月号)

目 次

告	辞	令和 2 年度新入生の皆さまへ(学長告辞)……………	2
研	究	令和 2 年度科学研究費助成事業交付内定一覧……………	6
	助	令和 2 年度外部資金の受入状況……………	8
	成		
人	事	人事異動……………	9
受	賞	本学大学院生が地盤工学会北海道支部賞(学生部門)を受賞……………	10
		本学教員が国際学会 AROB 25th 2020 で Best Paper Award を受賞……………	11
諸	報	「チーム村山」COVID-19 対策に向け、学生の活躍!……………	12
		農中森力基金の助成が決定……………	13
		「新入生へのブックガイド 2020」を発行……………	14
お	し	オープンキャンパス・東北地区進学相談会の中止……………	15
日	誌	4 月・5 月……………	16

= 告辞 =

令和2年度新入生の皆さまへ（学長告辞）

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

北見工業大学の教職員を代表しまして、皆さんのご入学を心から歓迎します。また、これまで皆さんのご成長を見守ってこられた保護者の皆様、関係者の方々に心よりお祝い申し上げます。

本学は、1960年に国立北見工業短期大学として、地域の大きな期待と共に開学しました。本年は、開学60周年を迎える年となります。当時の入学定員はわずか80名でしたが、その後、1966年に四年制大学となり、大学院設置などを経て国際化を推し進めた結果、現在では二千人を超える学生が在籍する規模となりました。今年度は、学部には7人の留学生を含む411人の新入生と16人の編入生が入学しました。また大学院には3人の留学生を含み、博士前期課程に106人、博士後期課程には7人が入学し、総勢540人の学生諸君が入学しました。

例年、北見市民会館で開催している入学式は、大変残念なことに新型コロナウイルスの感染拡大を防止するため、開催を断念することになりました。北海道では早い段階で急速に感染が拡大し、北見市でもクラスター感染が発生しました。そのため、北海道知事が緊急事態宣言を発表するまでに至り、小中学校の休校や週末の外出自粛が要請される事態となりました。感染拡大は依然として終息しておらず、本学としましても新入生の皆さんは勿論のこと、その他の在學生や教職員への感染拡大を可能な限り防ぐため、入学式の中止を決定しました。

学長としましては、皆さんに直接告辞をお伝えすることが叶わず、誠に遺憾である

と同時に、皆さんの人生にとって大切な思い出になるはずだった入学式を挙げるできないことを心よりお詫びします。

さて、今回の新型コロナウイルス感染の世界的な流行を目の当たりにして、皆さんは何を感じるでしょうか。未知のウイルス感染によるパンデミックは、人類の長い歴史の中で幾度となく繰り返されています。その都度、その時代における医療技術を最大限に駆使して治療法の開発が進められ、感染予防に関わる研究も長きにわたり続けられてきました。しかしながら多くの場合、そのような過去の経験が十分に活かされないまま社会は大きく混乱し、有効な手段が見つかるまでの間に被害が急速に拡大しています。改めて、未知の感染被害に対する人間社会の無力さ、脆弱さを感じざるを得ません。

感染症の原因となるウイルスは、自己増殖できないため、何らかの生物を宿主とします。新型コロナウイルスの感染が広がるということは、何らかの形で人類の営みはその生物にアクセスしたということです。そして、感染者とその他の人が直接的、あるいは間接的に接触することで感染が拡大します。かつて、ユーラシア大陸の東西を通る交易路として栄えた「シルクロード」は、人の往来と共にウイルスや細菌も運搬することになり、天然痘やペストのパンデミックを助長しました。現在では、人類の経済活動により進められてきたグローバル化の波が、ヒト・モノ・カネ・情報の流動性を格段に高め、日常生活の中でも急速に感染が拡大する状況になりました。この世界規模で起きたグローバル化は、産業界を中心とした

パラダイムシフトを引き起こし、インターネットや通信衛星に関わる技術をより一層発展させ、世界全体のボーダーレス化を加速しました。つまり、見方によっては科学技術の進歩がウイルス感染の拡大速度を大幅に向上させてしまったとも言えるわけです。

一方、科学技術の発展が人類に豊かさを与え、人類の夢を創造してきたことも確かな事実です。皆さんが本学で学ぶ工学は、自然科学を母体としながら基礎科学の進歩と科学技術の発展とともに、人類に貢献してきました。この人類と科学技術の関係は、今後どのように変化していくのでしょうか。世界の先進国が目指す第四次産業革命は、デジタル革命を基礎としており、ロボット工学、AI、ビッグデータ、IoT、ナノテクノロジーなど多岐に渡る分野での技術革新による、完全自動化されたスマートファクトリーに代表される産業界の大変革です。その中で日本社会が目指すSociety 5.0は、IoTで全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され新たな価値を生み出すことで、少子高齢化や地方の過疎化、貧富の格差など、本邦が抱える課題を克服することを目標としています。様々な経済活動がビッグデータ化され、それを分析・活用することで新たな経済価値を生み出し、さらにAIによって複雑な判断を伴う労働やサービスの自律的自動化が可能となりつつあります。単なる生産技術の革新だけに止まらず、個々の消費者ニーズにカスタマイズされたサービスが迅速に提供されることになり、従来人間によって行われていた労働や行動の一部が、AIやロボットに代替される事例も目にするようになりました。

米国の著名な発明家、未来学者であるレイモンド・カーツワイル氏は人工知能研究

の世界的権威として知られており、自身の著書の中で、人類は2045年に技術的特異点：シンギュラリティを迎え、人工知能が人間の知能を上回り、それ以降は人間の想像を超越して社会が進化していくと予測しています。このように、情報技術を基盤として世界が大きく変わりつつある中、工学を専門とする未来の技術者に求められる素養は、今後大きな転換期を迎えることは想像に難くありません。

これまでお話ししたように、科学技術の発展は人類の営みを豊かにする反面、簡単には解決できない課題も同時に生み出します。これからの技術者には、広い視野で多角的に物事を捉え、人間社会の多様性を理解し、高度な専門知識で課題解決に真摯に取り組む姿勢が求められます。大学では、単に専門知識を修得するだけに止まらず、広い視野と分野横断的な応用力を身につけ、自ら課題を発見し解決できる能力を磨き、ロジカルで力強い行動力を身に付けてください。

このような現代社会の大変革にも柔軟に対応できる技術者を養成するため、本学の学士課程は、2学科8コース制としています。工学の基幹分野である「機械」、「土木」、「電気・電子」、「情報」、「化学」、「材料」などを基盤としながらも、それぞれ異なる分野を横断的に学べる仕組みを導入し、学年進行に伴い自分の専門分野を絞り込むことが可能になっています。二学科の一つである「地球環境工学科」では、総合的に環境問題やエネルギー問題に取り組める応用力を身に付けることができます。一方、「地域未来デザイン工学科」では、身の回りに起こり得る様々な課題の解決に向けて、積極的に取り組むことができる人材を養成します。いずれの学科でも、多くのアクティ

ブラーニング科目や課題解決型学習の機会を提供し、自ら課題を発見し、自信を持って解決できる能力を磨くことができます。

また研究面では、4分野を重点研究分野と位置付け、それぞれ4つのセンターで地域性を活かした特色ある研究を推進しています。「環境・エネルギー研究推進センター」では、新たなエネルギー資源として、オホーツク海のメタンハイドレートに着目した研究を行っています。また、「冬季スポーツ科学研究推進センター」では、カーリングとアルペンスキーを2本柱として、工学的支援により地域での冬季スポーツ振興と、アスリートの競技力向上・国際的活躍を目指しています。「オホーツク農林水産工学連携研究推進センター」では、バイオ食品技術、ロボット化技術、ICTなどを、オホーツク地域の特色ある第一次産業に展開し、農・林・水産の分野を越えたユニークな工学連携を推進しています。さらに、「地域と歩む防災研究センター」では、積雪寒冷地域における防災力向上に貢献するための研究成果の社会還元を、地域とともに行うことを目的としています。

皆さんがこれから学び、研究に携わる工学は、人類の営みを豊かにするための学問です。この度の世界的な感染症拡大によって、我々は人類の豊かさについて、多くの気付きがありました。経済的利益の追求だけでは豊かな生活を実現できないばかりか、不安で不便な生活を強いられ、逆に経済活動が急激に停滞するという経験を通じて、豊かさというものは、安全で安心な日常生活の上で成り立つものだと実感しました。世界的歴史学者で哲学者のユヴァル・ノア・ハラリ氏は、米国のTIME誌に新型コロナウイルスに関する記事を寄稿し、今回の大流行を終息させるためには脱グローバル

化しかないという意見に反論しました。感染症を封じ込めるために短期の隔離は不可欠だとはいえ、長期の孤立主義政策は経済の崩壊につながるだけで、真の感染症対策にはならないとしています。感染症の大流行への本当の対抗手段は、分離ではなく協力であり、人々は科学の専門家を信頼し、国民は公的機関を信頼し、各国は互いを信頼する必要がある、と述べています。このことは、あらゆるフェイズで人々が信頼関係を構築し、最終的には国同士の国際的信頼関係が人類の豊かな営みに結び付くことを示しており、その基盤となる人間同士のコミュニケーションが重要だということを示唆しています。

いくら情報科学が進歩しても、SNS だけでは正しく意思を伝達し、相互理解を深め信頼を得るまでには至りません。例えば人の会話では、単に言語で意思を伝達するだけでなく、語気や顔の表情の変化を加える、ジェスチャーを交えるなど、複合化した情報をインタラクティブに通信し合うことで、真のコミュニケーションを可能にしています。皆さんにとって、このコミュニケーション力の向上は、将来的に非常に重要となります。その第一歩として、是非、学生生活の中で多くの学生と接し、新たな友人を作ってください。本学には、全国各地の様々な文化を背景に育ってきた友人に出会えるチャンスがあります。また、様々な国から来学した留学生との交流もできます。多様な個性を持つ、より多くの友人と意見を交わしながらコミュニケーション力を磨き、皆さんの将来に活かして欲しいと切に願います。

結びになりますが、大学での学生生活は皆さんの人生にとって、非常に貴重なものになります。輝かしい未来への希望と期待

を胸に、一瞬一瞬を大切に過ごしてください。とします。
皆さんの学生生活が充実したものになりますよう祈念いたしまして、歓迎の挨拶

令和2年4月8日
北見工業大学長 鈴木 聡一郎

= 研究助成 =

令和2年度科学研究費助成事業交付内定一覧

○新学術領域研究（研究領域提案型）

（研究協力課）

氏名	職名	研究課題	交付内定額 (単位：千円)	新規	継続
佐藤 和敏	助教	南極暖湿化の原因とその影響の定量化	2,600	○	

○基盤研究(B)一般

氏名	職名	研究課題	交付内定額 (単位：千円)	新規	継続
川尻 峻三	准教授	間隙水圧の多地点観測による堤防決壊リスクの見える化技術の確立	7,540	○	
小原 伸哉	教授	CO2ハイドレート熱サイクルによる低温排熱の電気エネルギー変換	7,930	○	
平井 慈人	准教授	d電子間に働く強い相互作用が生み出す酸素発生触媒の開発	14,430	○	
南 尚嗣	教授	バイカル湖で解き明かす環境変動によるメタンハイドレート分解と温室効果ガスの放出	1,950	○	
山下 聡	教授	北海道周辺海域におけるメタンハイドレートの生成メカニズムと資源化アプローチ	3,640		○
渡邊 康玄	教授	扇状地河川における突発的な河道の移動現象の機構解明とその対策手法の開発	6,760		○
川村 みどり	教授	銀薄膜の高湿度下での耐性向上のメカニズムの解明	2,860		○
齋藤 徹	教授	気液界面修飾型薬物捕捉場の創成と持続可能な水系反応分離工学の構築	5,460		○

○基盤研究(C)一般

氏名	職名	研究課題	交付内定額 (単位：千円)	新規	継続
Claro Jennifer	講師	The Effect of English-Speaking Role Models on the Motivation to Learn English of Japanese University Students	1,170	○	
松田 一徳	准教授	非Cohen-Macaulay環における環論的不変量の相互関係の探求	910	○	
吉澤 真吾	准教授	水中音響通信におけるレトロディレクティブ方式送信ビームフォーミングの実験検証	2,860	○	
平山 浩一	教授	ミリ波帯における自由空間法の測定精度を決める要因の解明	1,690	○	
川口 貴之	教授	変わりゆく気候や社会も見据えた積雪寒冷地に適したのり面保護工の開発と提案	1,820	○	
岡崎 文保	准教授	バイオメタン直接改質を利用した大気中二酸化炭素固定化プロセスの開発	1,950	○	
木場 隆之	助教	金属ナノ構造を用いた量子ドットLEDの高効率化とその機構解明	2,600	○	
吉田 孝	教授	硫酸化糖鎖の未解明抗ウイルス性メカニズムの解決	1,950	○	
大野 智也	教授	ナノ構造制御により活性サイトの溶出を抑制したコアシェル型酸素発生触媒の開発	2,340	○	
木田 真人	助教	自然冷熱を活用した低炭素資源貯蔵のためのクラスレートハイドレートのガス包蔵性解明	2,730	○	
梅村 敦史	准教授	風力発電平均電力の学習予測制御を備えた系統連系インバータの研究	0		○
服部 和幸	准教授	低エネルギーで真に実用可能な結晶セルロースの加水分解法の検討	0		○
戸澤 隆広	准教授	ミニマリスト・プログラムにおける関係節と比較節の研究	390		○

氏名	職名	研究課題	交付内定額 (単位：千円)	新規	継続
蒲谷 祐一	准教授	低次元多様体の基本群の高次表現と幾何構造	520		○
升井 洋志	教授	核子対相関と非束縛状態を基とした核構造の多様性の系統的解明	780		○
森田 慎一	教授	CNT分散潜熱蓄熱材による高速蓄熱に関する研究	910		○
渡辺 美知子	准教授	ビヘイビアコンポジットによるカンブリア紀古代魚の複合・複雑行動の獲得	390		○
田口 健治	准教授	3次元電磁界解析に基づく中間周波帯の人体ばく露安全評価と国際標準化	1,430		○
高橋 理音	准教授	離島・非電化地域における自然エネルギー利用導入に向けたマイクログリッド技術の開発	910		○
武山 眞弓	教授	最先端3次元デバイス及び3D-LSIに適用可能なCu配線における革新的配向制御	910		○
柴田 浩行	教授	超伝導単一光子検出器の20K動作	1,170		○
井上 真澄	准教授	温水循環式エアヒーターを用いた省エネ型コンクリート給熱養生システムの構築	1,040		○
宮森 保紀	准教授	高密度画像計測データの構造解析モデルへの直接的変換－鋼構造への粒子法の適用	780		○
吉川 泰弘	准教授	寒冷地河川における実用的アイスジャム計算モデルの開発と陸面モデルによる広域展開	780		○
高橋 清	教授	自転車走行を考慮した路面評価システムの構築	910		○
川村 武	准教授	暴風雪悪視界下で吹き溜まりの検知・回避と脱出のための車両ナビゲーションシステム	1,170		○
古瀬 裕章	准教授	透光性多結晶アパタイト蛍光体の高品位化と特性評価	650		○
大津 直史	教授	非水溶媒陽極酸化を用いた“感染症を防ぐ”可視応答光触媒被膜チタン手術器具の創製	1,820		○
酒井 大輔	准教授	電圧プリントと選択堆積を用いた汎用ガラスへの光機能創成	780		○
新井 博文	教授	二酸化チタンによる皮膚の酸化ストレス障害と天然抗酸化物質による予防	1,300		○
吉田 裕	准教授	放射光透過ラウエ法を用いた曲げ負荷中の単結晶の回転と残留ひずみ解析	1,430		○
中村 大	准教授	寒冷地における植生工の補強効果とその限界に関する明示化	2,080		○
富山 和也	准教授	ハンドル型電動車椅子の乗り心地に基づく歩道路面の点検および診断システムの開発	910		○
白川 龍生	准教授	日本版「冬の厳しさ指数」の提案－雪環境変化を見据えた予防保全型マネジメント	390		○
林田 和宏	教授	燃料中の硫黄分が船用ディーゼル機関のすす粒子特性に及ぼす影響の解明	910		○
河野 義樹	助教	イメージベース結晶塑性解析を用いたチタン合金のひずみの再分配機構の解明	1,040		○
阿部 良夫	教授	基板とターゲットの表面状態を独立に制御した高速スパッタ成膜技術	1,300		○
原田 建治	教授	汎用ガラスを用いたホログラム採光窓の作製	520		○
安井 崇	准教授	高性能・広帯域な光集積回路設計のための製造容易性を考慮した自動最適設計システム	650		○
杉坂 純一郎	准教授	ホロ・レコグナイザ：計算機から光学系への機械学習拡張による物体の完全3次元知覚	650		○

○若手研究

氏名	職名	研究課題	交付内定額 (単位：千円)	新規	継続
ウ アテイ	助教	労働集約型作業における生産性に係わる人材力向上に関する研究	1,820	○	
澁谷 隆俊	助教	すばる望遠鏡 広領域探査データを用いた遠方銀河形態の研究	1,170	○	
伊藤 敦	准教授	低医療費と良質な医療提供の実現に向けたプライマリ・ケアの機能強化方法に関する研究	1,820		○
楊 亮亮	助教	車輪式農用車両の傾斜地における横滑り発生機構の解明と動的横滑り防止制御	650		○
蔭西 知子	特任研究員	シグナリング分子としての細胞外ATPの植物での分泌・受容機構の解明	780		○
橋本 泰成	准教授	ブレイン・マシン・インタフェースを使ったベットの脳卒中リハビリシステムの開発	650		○
宮崎 健輔	准教授	汎用プラスチックを用いたリサイクル型生分解性循環材料の開発	520		○
渡邊 達也	助教	同時多点位置観測から地すべり発生プロセスを解明する	650		○
佐藤 和敏	助教	気象災害を防止する極域観測網の構築	1,690		○
齊藤 剛彦	准教授	リアルタイムハイブリッド実験による極低温環境下の免震橋梁の地震応答の解明	2,990		○
山内 翔	助教	「人に愛されるロボット」を具現化する3Dプリンタによるロボット構築手法	390		○

○特別研究員奨励費

氏名	職名	研究課題	交付内定額 (単位：千円)	新規	継続
大岩 真子	特別研究員	界面分離型薬物捕捉場の設計と低環境負荷・持続可能型水環境保全技術の開発	800		○

令和2年度外部資金の受入状況

(研究協力課)

	令和2年5月31日までの合計		前号までの合計		令和2年度累計	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
共同研究	52	40,904	—	—	52	40,904
受託研究	4	11,500	—	—	4	11,500
奨学寄附金	12	9,013	—	—	12	9,013

= 人事 =

人 事 異 動

(総務課)

○大学発令

発令年月日	現職名	氏名	新職名(発令事項)
2.4.6	総務課副課長	斉藤 靖子	総務課副課長(研究協力課副課長兼務)

= 受賞 =

本学大学院生が地盤工学会北海道支部賞（学生部門）を受賞

（地域と歩む防災研究センター）

このたび、本学大学院生修了生の山口澁平さん（論文発表時、社会環境工学専攻 2 年、寒地岩盤工学研究室、指導教員：中村大 准教授）、小川かけるさん（論文発表時、社会環境工学専攻 1 年、地盤工学研究室、指導教員：山下 聡 教授）が、公益社団法人地盤工学会北海道支部より、令和元年度地盤工学会北海道支部賞（学生部門）を受賞しました。

この賞は、地盤工学会北海道支部発行の「技術報告集」に掲載された論文の中から、研究内容に加えて学会発表時のプレゼンテーション力についても評価の対象となって

選出されます。

論文タイトルは、山口さんが「浸水条件の違いが植物根系を含む細粒土のせん断強度特性に及ぼす影響」、小川さんは「札幌市里塚地区で採取した火山灰質土の液状化特性」です。

両論文ともに、本学地域と歩む防災研究センター/SAFER で取り組んでいる積雪寒冷環境における地盤防災・減災技術の研究・開発に関するものであり、行政機関や学内外の研究者との共同研究の成果が高く評価されました。



賞状とメダルを掲げる（左から）山口さんと小川さん

本学教員が国際学会 AROB 25th 2020 で Best Paper Award を受賞

(機械電気系)

1月22日(火)～1月24日(木)、大分県別府市で開催された The 25th International Symposium on Artificial Life and Robotics (AROB) において、本学のラワンカル・アビジット助教(Abhijeet Ravankar、機械電気系)が Best Paper Award を受賞しました。

ラワンカル助教は、渡辺美知子准教授、星野洋平教授(共に機械電気系)を共著者とした「Path Planning for Service Robots

in Continuous Operation」という題目の論文を口頭発表しました。

この論文は、自律移動ロボットのコアとなる『ロボット経路計画アルゴリズム』に関するもので、警備や掃除などに使用されているマルチロボットシステムの円滑な操作を可能とする研究について述べたものです。論文の質と口頭発表が高く評価され、今回の受賞となりました。



賞状

「チーム村山」 COVID-19 対策に向け、学生の活躍！

(研究協力課)

4月13日(月)～14日(火)の二日間、本学入口のひとつである3号館のエントランスにおいて、サーモセンサとカメラによる体温監視システムのトライアルを実施しました。

本システムは、本学学生寮である「北苑寮」の自治組織が、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために製作したシステムを基に、その精度とユーティリティの更なる向上を目指すものです。

寮生である本学学生の村山風輝さん(地球環境工学科3年)と本学大学院生の平田英明さん(情報システム工学専攻1年)が、機械電気系教員(岩館健司助教、早川吉彦准教授、鈴木育男准教授、星野洋平教授、奥村貴史教授)の指導を受けながら、チーム一丸となり研究開発を進めています。

トライアルでは、通行人同士が密にならないことに注力し、センサの前を歩いたり

立ち止まったりする方々の表面体温をモニタリングしました。多くの方々の体温のデータを集めることにより、本システムの精度を高めることがねらいです。

村山さんは「このシステムを考えた当初の3月中旬頃には、このように本格的な実験に発展するとは考えてもいなかったのができて、驚きもありつつやりがいを感じています。このシステムが、新型コロナウイルス感染拡大防止に役立つものとなれば嬉しいです。」と話しています。

本システムの開発はまだ始まったばかり。今後は、高熱検知の際のアラーム鳴動や発熱者へのアフターフォローなど新たな機能を加えてシステムを充実させたい考えです。



モニタリング状況を解説する村山さん

農中森力基金の助成が決定

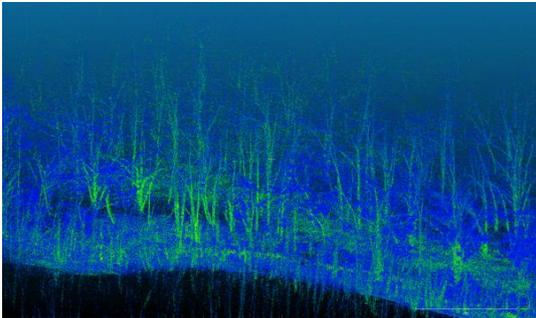
(研究協力課)

鶴居村森林組合(松井洋和組合長)が、本学オホーツク農林水産工学連携研究推進センター(通称:CAFFÈ)と連携して申請した事業が、公益信託 農林中金森林再生基金(通称:農中森力(もりぢから)基金)助成事業に採択されました。

本基金は荒廃した民有林の公益性を発揮させることを目指した活動に対して助成されるものです。我が国では、東日本大震災や北海道胆振東部地震以降、停電時の暖房用燃料として薪の需要が増大しています。また、その他にも多様な木材利用を積極的に取り組むためには最新の計測技術を取り入

れた広葉樹林の管理が不可欠です。このことを背景に、当該事業ではCAFFÈの林業分野担当 川口貴之副センター長らの研究技術を活用し、広葉樹林の再生を目指します。

具体的には、広葉樹の特性を踏まえた森林3次元計測システム(本学が所有する3Dマッピングユニット)を活用し、施業地の立木マップの作成や、間伐実施後の将来予測画像を作成することにより、可視化と林業所得増大・経営意欲向上を目指した「見(魅)せる化」を意識した先進的な試みを実施・効果検証していく計画です。



森林3次元計測システム
データ可視化イメージ



データ取得の様子

「新入生へのブックガイド 2020」を発行

(情報図書課)

本学図書館において、新入生への推薦図書をまとめたパンフレット「～教職員と先輩がすすめる～新入生へのブックガイド 2020」を作成しました。

「新入生へのブックガイド」は、新入生が図書館を利用するきっかけとなるよう作成したもので、工学を学ぶ上での入門書から趣味や雑学に関するものまで、幅広い分野の図書を紹介する内容となっています。今回からページを増やし、紹介する図書も大幅に増えてバラエティに富んだブックガイ

ドとなりました。

パンフレットの作成にあたっては、教員や事務職員のほか、読書推進活動を行う学生ボランティア団体「ブック・プロジェクト」、図書館で働いている大学院生にも紹介原稿の執筆に協力してもらいました。

こちらのパンフレットは本学の機関リポジトリ KIT-R で公開していますので、興味のある方は新入生に限らず、ぜひご覧になってください。



「新入生へのブックガイド」



ブックガイドの内容

=おしらせ=

オープンキャンパス・東北地区進学相談会の中止

(入 試 課)

例年7月下旬に開催しているオープンキャンパスならびに、例年6月下旬に青森市、八戸市、盛岡市で開催している東北地区進学相談会は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、止むを得ず中止することとなりました。

= 日誌 =

4 月

- 2日 技術セミナー（技術士養成支援講座）
- 6日 オホーツク産学官融合センター事務局会議
- 10日 大学評価委員会
- 15日 キャリアアップ支援センター拡大連絡協議会
- 16日 アドミッションセンター運営会議
- 17日 発明審査委員会
- 20日 学生委員会
- 21日 教務委員会
- 23日 研究支援室会議
- 24日 地域連携・国際交流委員会
- 27日 学術推進機構統括会議、社会連携推進センター推進協議会総会
- 30日 役員会

5 月

- 7日 編入学（推薦）出願受付（～13日）
- 11日 オホーツク産学官融合センター事務局会議
- 13日 アドミッションセンター運営会議
- 14日 発明審査委員会
- 15日 教務委員会、北見市産学官連携推進協議会
- 18日 役員会
- 19日 学生委員会
- 27日 役員会